

第2回 山元町有識者会議

【第2回山元町復興會議資料】

平成23年7月24日

山元町

1. 第1回復興会議における住民代表委員意見（平成23年6月19日）

第1回復興会議が平成23年6月19日に開催された。参加した住民代表委員からの意見としては以下のようなものが出された。

1. 町の将来像・まちづくりビジョンについて

- ・「町は町民のために、町民は町のために」という関係を復興の基本的な姿勢にしたい。
- ・住民と行政がしっかりスクラムを組むことが基本である。
- ・人と人とのつながり、人と自然のつながりを大切にすまちづくりを目指したい。
- ・若者が定住できる希望の持てるまちづくりが最大のポイントである。
- ・コンパクトシティの概念を詳しく聞きたい。
- ・磯・中浜・新浜地区の住民は従来の場所には住みたくないという意見が多く、磯地区においては集団移転せざるを得ないという意向が強い。
- ・まちづくりのイメージ、骨格づくりを議会に示されているが、例えば、高台への集団移転やいちごづくりの新たなプラン実現等の費用はどこから出するのか、費用が出ないとなればいろいろ考えても仕方がない。
- ・これからのまちづくり復興においては地域のコミュニティが重要になるので、行政区単位程度で移転が可能なプランを作ることが大事である。
- ・スケジュールでは7月に復興基本方針を決めるとあるが、方針とはどこまで決めるのかを教えてください。居住地区をどこに持っていくかという事が一番深刻な問題である。

2. 土地利用について

- ・第一に居住場所と生活の糧となる農地の確保をお願いしたい。
- ・どこまでが居住区になるのかなど土地利用計画の方針と青写真を早く示して欲しい。
- ・基本計画特に土地利用計画は地域の意見、地域の力を活かした計画にすべきである。
- ・居住区と非居住区とのボーダーラインが一番気になる場所である。
- ・坂元・磯地区と山下駅周辺地区では津波の来方が違うので、その辺を考慮した安全な住まいの地区を考えて欲しい。
- ・集団移転をせざるを得ない時は6号線の上（西側）に住居をかまえるべきではないか。
- ・いちごづくりの農地をどの辺りに確保できるかが問題である。土壌の関係で農免道路の上の地域で再開していきたいと思っている。将来農免道路を新たなストロベリーラインにしたい。

3. 交通（鉄道・道路）について

- ・常磐線の復旧が遅れると人口減がますます進むだろう。
- ・足の便の確保が第一である。
- ・電車を早く通して子供たちが通学できる町にして欲しい。
- ・常磐線のルート、新駅の位置等については近隣市町村としっかり議論すべきである。
- ・町の将来像と合わせた常磐線の新路線を作成し、しっかり要望していくべきではないか。
- ・仮の常磐線はあり得ない。復旧には時間がかかるので東北本線駅への直通バスを増やして欲しい。役場から岩沼駅までの直通バスの確保はできないだろうか。

- ・常磐道のルート変更を大胆に求めるべきではないか。

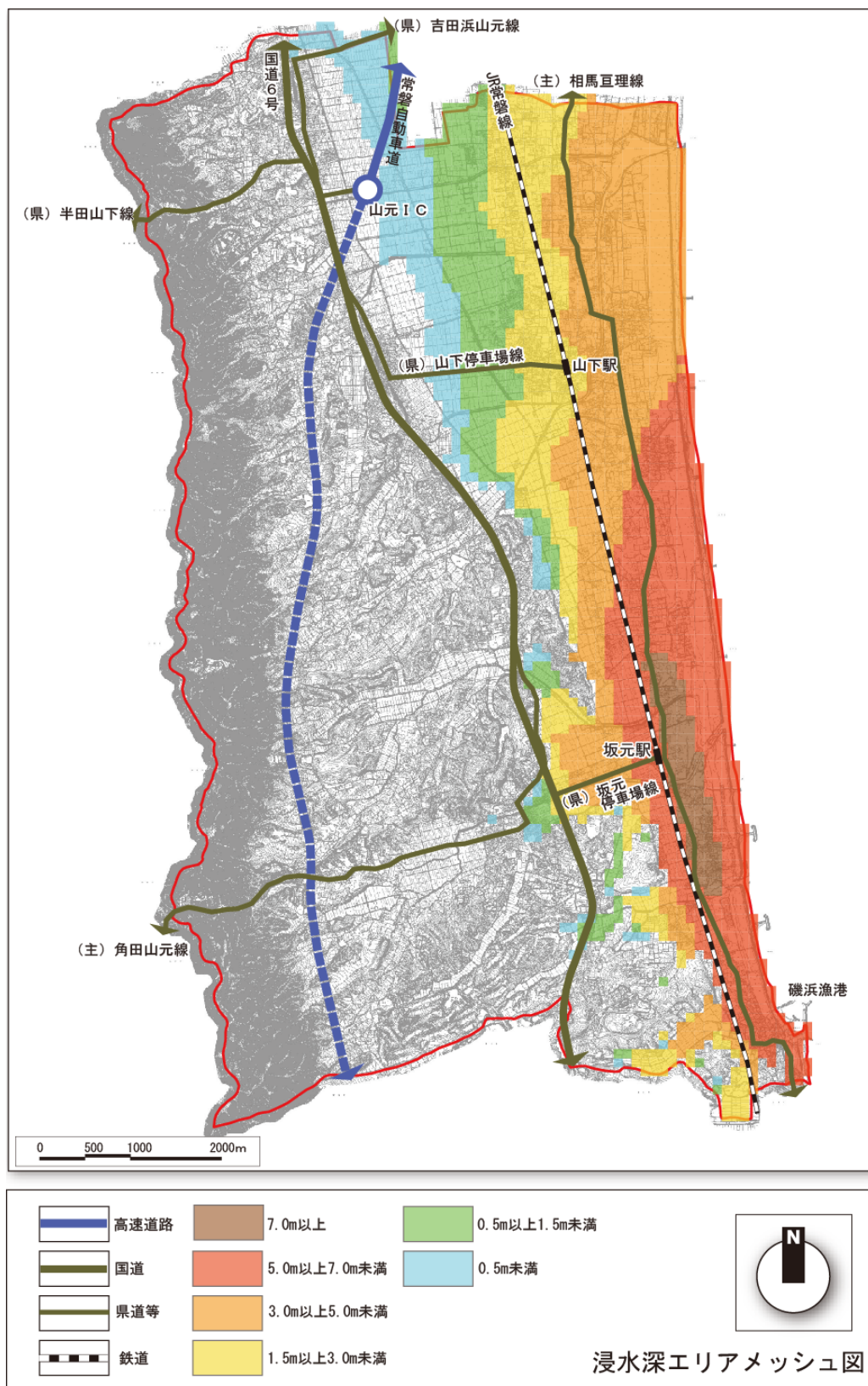
4. 生活・環境・景観等

- ・子供たちやお年寄りの心のケアが必要である。
- ・今回の津波被害が何故場所によって差が出たかを吟味して欲しい。
- ・県道相馬亘理線を防波堤代わりに嵩上げすればいいのではないか。
- ・今作っている防潮堤の高さは2 mしかないので、台風で一発で壊れてしまう
- ・防潮林については、今回松の木がやられてしまったので、もっと根が張るような樹種を考えるべきである。
- ・仮設住宅は何年持つか不明だが、後々に町営住宅にしてはどうか。
- ・仮設住宅はあくまでも仮設であるので、きちんとした町営住宅を考えて欲しい。

II. 浸水深による被災状況 (6月24日調査時点)

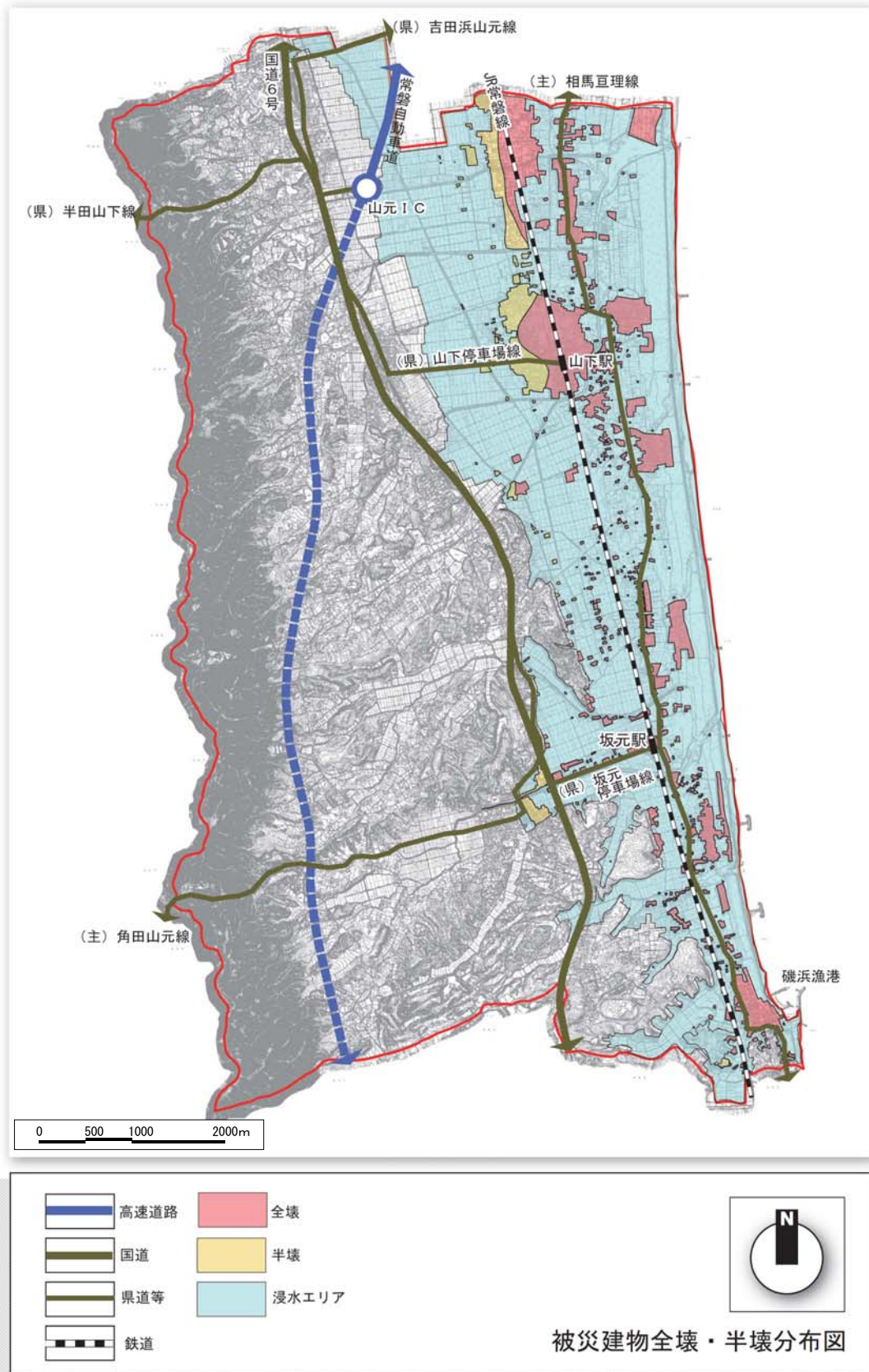
1. 浸水深

- ・ 海岸沿いの牛橋、花釜、笠野、新浜、中浜、磯地区の6地区が津波により水没。花釜地区山下駅周辺の市街地のみ建物半壊が広がるが、他地区は大半が流出し全壊した。
- ・ このうち、中浜地区を中心に水深7m以上の浸水、磯、新浜、笠野地区が5m以上7m未満、花釜、牛橋地区が3m以上5m未満の地区と1.5m以上3m未満に分かれている。



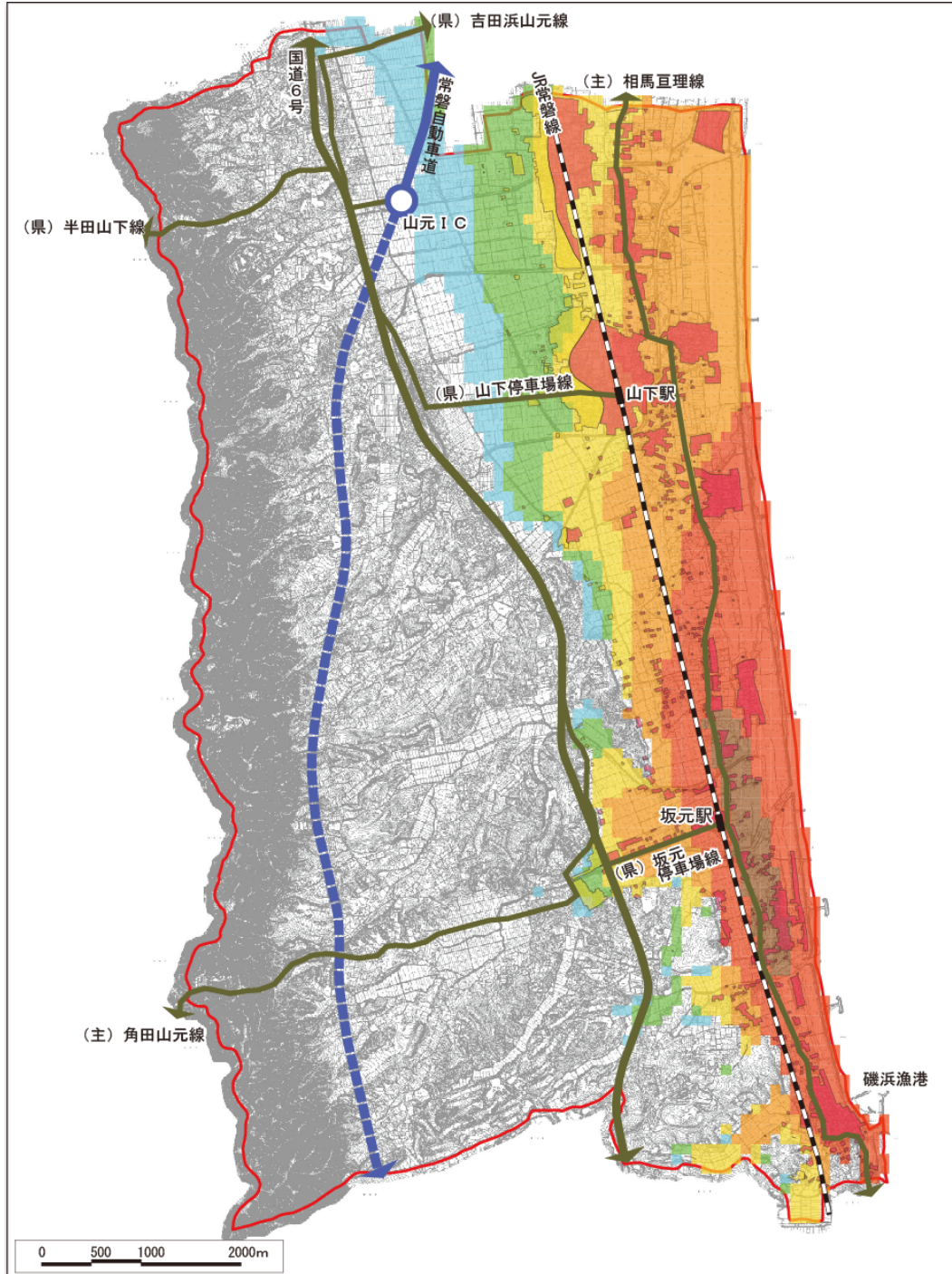
2. 浸水エリア内における全壊・半壊

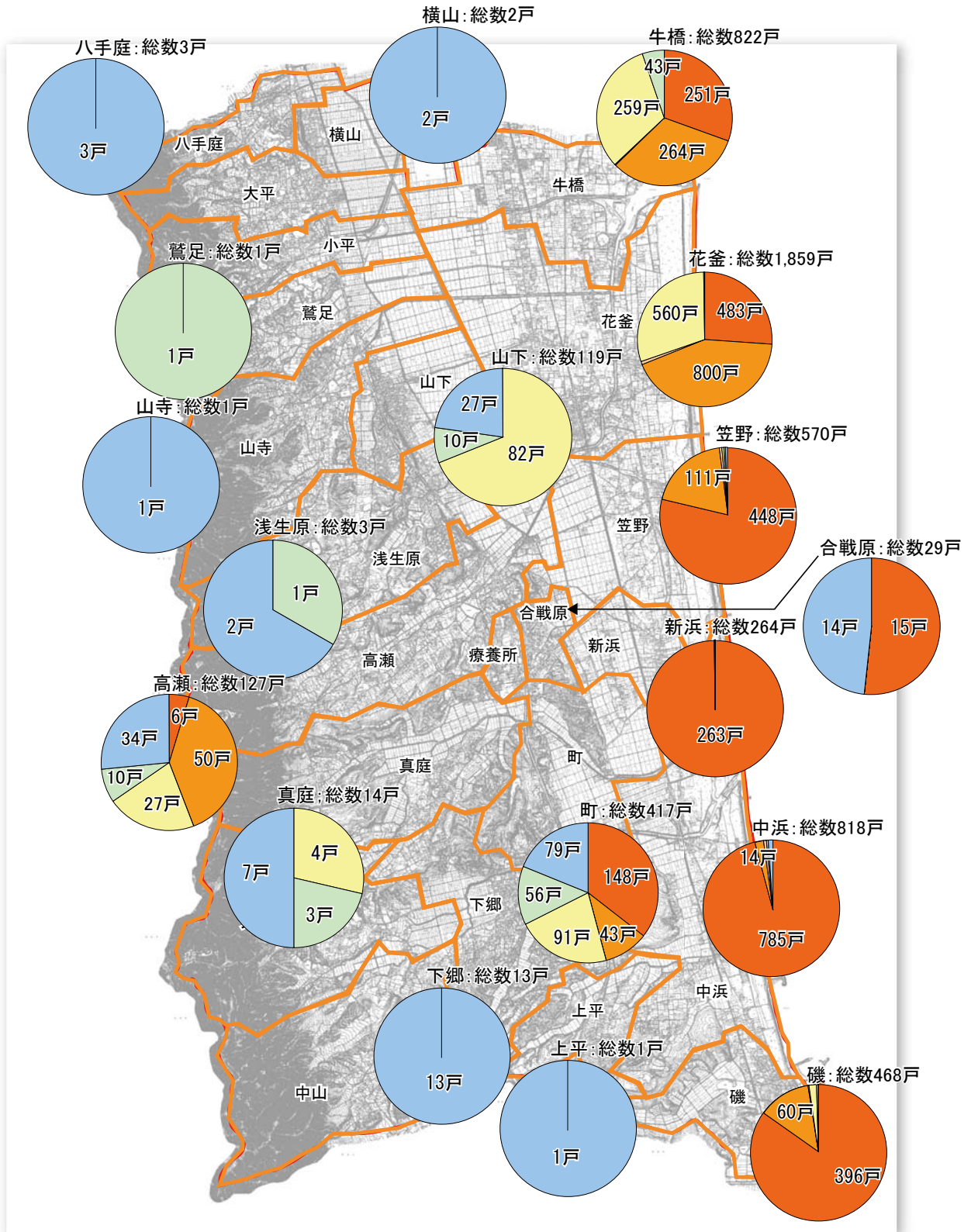
- 国土交通省による被災建物現況調査（個別踏査結果）によると下記に示すように J R 常磐線以東の建物が全て全壊・流出している。また、建物が比較的多く立地していた花釜・牛橋地区の J R 常磐線以西については半壊建物が残っている。



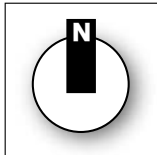
3. 浸水深別の建物被害

- ・ 浸水深別の建物の被害状況を見ると、全壊（流出）建物のほとんどが 1.5m以上のエリアに属していることがわかる。
- ・ さらに、次ページに示す、行政区別の浸水区域内被災建物棟数集計表を見ると、浸水 2m以上になると急激に全壊数が多くなっていることがわかる。





地区行政界
 全壊(流失)
 全壊(撤去)
 全壊(条件付き再生可)
 大規模半壊
 半壊(床上浸水)
 一部損壊(床下浸水)


 行政区別における
 浸水区域内被災建物棟数

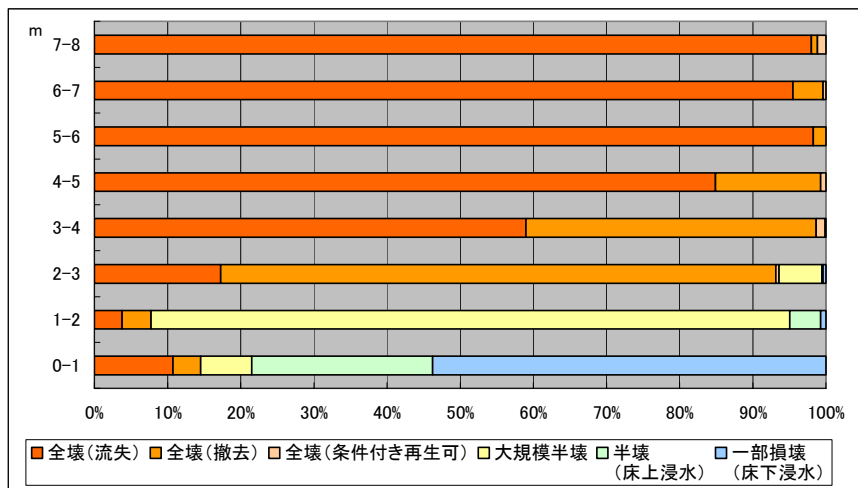
▼山元町浸水区域内被災建物棟数集計表

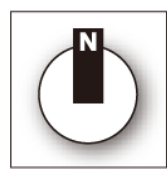
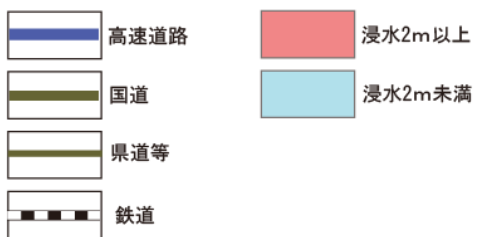
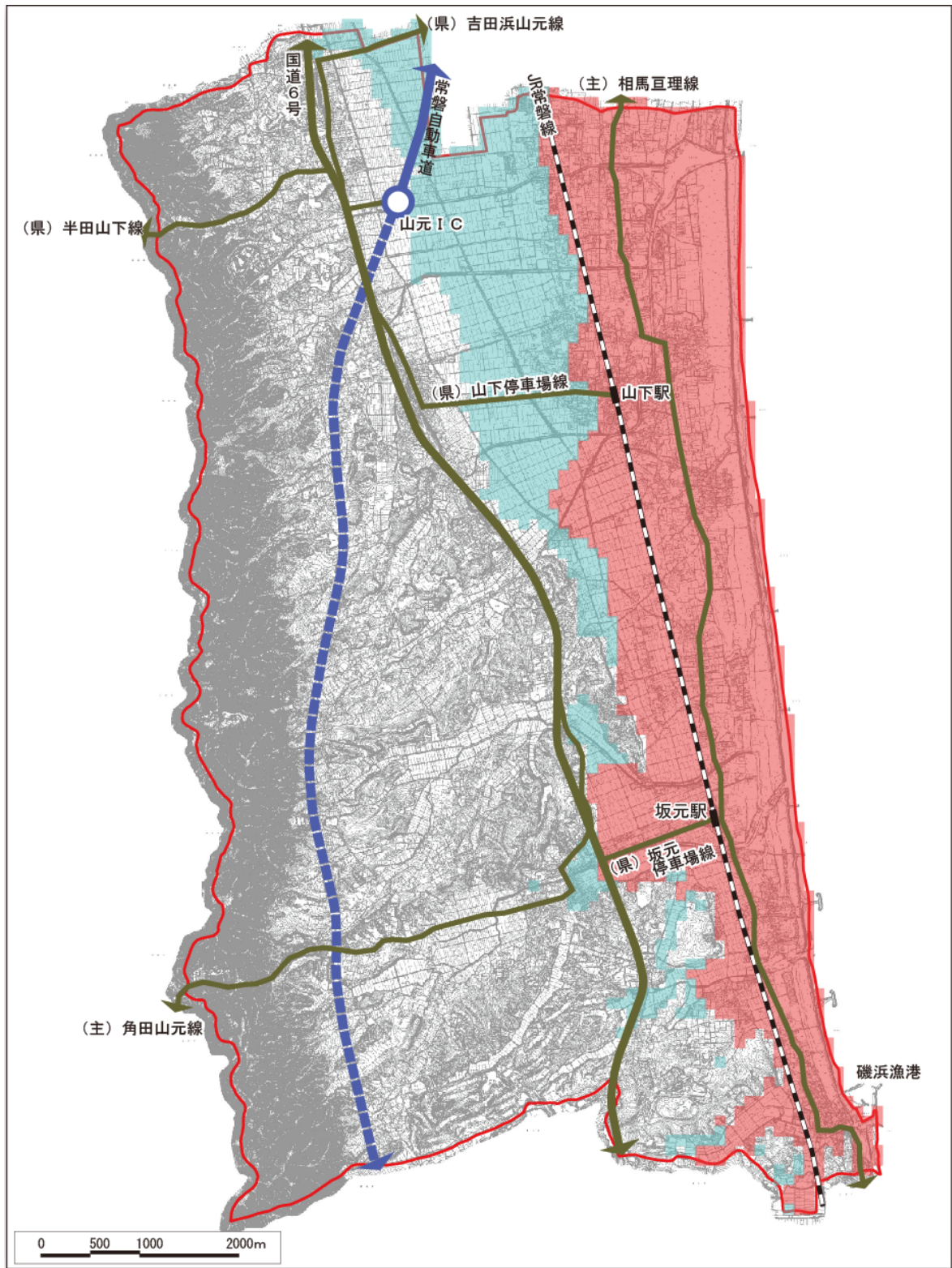
○行政区毎集計

行政区/ 被災区分	全壊(流失)	全壊(撤去)	全壊(条件付き再生可)	大規模半壊	半壊 (床上浸水)	一部損壊 (床下浸水)	総計(棟)
磯	396 84.6%	60 12.8%	1 0.2%	9 1.9%	2 0.4%	0 0.0%	468 100%
横山	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 100.0%	2 100%
下郷	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	13 100.0%	13 100%
花釜	483 26.0%	800 43.0%	11 0.6%	560 30.1%	5 0.3%	0 0.0%	1,859 100%
笠野	448 78.6%	111 19.5%	3 0.5%	4 0.7%	1 0.2%	3 0.5%	570 100%
牛橋	251 30.5%	264 32.1%	4 0.5%	259 31.5%	43 5.2%	1 0.1%	822 100%
高瀬	6 4.7%	50 39.4%	0 0.0%	27 21.3%	10 7.9%	34 26.8%	127 100%
合戦原	15 51.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	14 48.3%	29 100%
山下	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	82 68.9%	10 8.4%	27 22.7%	119 100%
山寺	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	1 100%
上平	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 100.0%	1 100%
新浜	263 99.6%	0 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	264 100%
真庭	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 28.6%	3 21.4%	7 50.0%	14 100%
浅生原	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 33.3%	2 66.7%	3 100%
中浜	785 96.0%	14 1.7%	7 0.9%	0 0.0%	2 0.2%	10 1.2%	818 100%
町	148 35.5%	43 10.3%	0 0.0%	91 21.8%	56 13.4%	79 18.9%	417 100%
八手庭	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 100.0%	3 100%
鷺足	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 100.0%	1 0.0%	1 100%
総計(棟)	2795 50.5%	1343 24.3%	26 0.5%	1036 18.7%	134 2.4%	197 3.6%	5,531 100%

○浸水深1m毎集計

浸水深(m)/ 被災区分	全壊(流 失)	全壊(撤 去)	全壊(条件 付き再生 可)	大規模半壊	半壊 (床上浸 水)	一部損壊 (床下浸 水)	総計(棟)
総計(棟)	2795 50.5%	1343 24.3%	26 0.5%	1036 18.7%	134 2.4%	197 3.6%	5531 100%
7-8	342 98.0%	3 0.9%	4 1.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	349 100%
6-7	744 95.5%	32 4.1%	3 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	779 100%
5-6	564 98.3%	10 1.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	574 100%
4-5	354 84.9%	60 14.4%	3 0.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	417 100%
3-4	524 59.0%	352 39.6%	11 1.2%	0 0.0%	0 0.1%	0 0.0%	888 100%
2-3	189 17.3%	830 75.9%	5 0.5%	64 5.9%	2 0.2%	4 0.4%	1094 100%
1-2	41 3.8%	43 4.0%	0 0.0%	948 87.3%	46 4.2%	8 0.7%	1086 100%
0-1	37 10.8%	13 3.8%	0 0.0%	24 7.0%	85 24.7%	185 53.8%	344 100%





浸水深2m境界区分図

Ⅲ. 復興まちづくりを行うにあたり検討する事項

1. 安全性

- ・ 甚大な被害を受けた当町において、これからの復興まちづくりについては、「町民の生命の安全」が第一である。
- ・ また、町民の財産、まちの財産を守ることも重要である。このためにはこれらの財産についても安全性が保たれる場所や、安全な守りを固めることが大切である。

2. 利便性

- ・ 当町は、JR常磐線、常磐自動車道、国道6号等が通り、仙台まで1時間圏内の位置にあった。しかし、被災後、JR常磐線が被災を受けたことにより、定時性をもった公共交通の確保が困難となっている。
- ・ 復興には人々の交流によって活気が生まれ、人、モノ、情報が行き来する。このため今後の鉄道の復興に対しては、災害に強い、安全なルート選定が望まれる。

3. 快適性

- ・ 当町は、東北地方の中でも温暖な地域として、一年を通して快適に過ごせる環境が大きな売りであった。
- ・ また、この温暖な気候を求めて当町に移り住んだり、セカンドハウスを求めたりする人が多かった。
- ・ このような良好な環境を生かした、快適に暮らせるまちづくりが求められている。
- ・ 特に、国立宮城病院や各種福祉施設等、医療・福祉施設が充実する当町の特徴を生かした新しい復興まちづくりが求められている。

4. 産業基盤

- ・ 当町は、イチゴの町としても有名で、数多くのイチゴ農家が良質のイチゴ生産を行っていた。しかし、今回の津波によりイチゴ農家の約9割が農業施設等に被害を受け、県内有数のイチゴ生産地が壊滅的な状態になっている。
- ・ 特に、低地部に広がる農地のほとんどが海水を被ってしまい、今後の農業生産等については復興まちづくりと合わせた新しい農業のあり方等の検討が望まれる。